

2. 講演「家族を亡くした子供の親として」

交通事故で子供を亡くしたご遺族である井上郁美氏より、「家族を亡くした子供の親として」の講演が行なわれた。講演の要旨は、以下の通りである。

〔講演要旨〕

平成 26 年度内閣府交通事故被害者サポート事業検討会 委員

飲酒・ひき逃げ事犯に厳罰を求める遺族・関係者全国連絡協議会 幹事 井上郁美 氏

○ 事故の概要と子供たちの状況

今から 15 年前、私の 2 人の娘、井上奏子（かなこ）と井上周子（ちかこ）は、東名高速道路上で酒酔い運転のトラックに追突され、亡くなりました。今、生きていたら、奏子は大学 1 年生、周子は高校 2 年生になっていたであろうと思います。車の後部座席に座っていた娘たちは、私たち両親の目の前で亡くなりました。炎で燃えさかる車を、私は何もできないまま、ただひたすら眺めていた、そんな事故でした。助手席に座っていた夫は、背中と左腕に大やけどを負って 3 カ月間入院しました。私ひとりだけが奇跡的に、怪我らしい怪我を負うこともありませんでした。

我が家では、毎年「奏子ちゃんと周子ちゃんを偲ぶ会」を開いています。1 年に 1 回、有志の方々にもお集まりいただき、思いっきり奏子と周子について話す機会です。娘たちの話を聴いてもらいたいということもありますが、やはり遺されたきょうだいにも、奏子と周子のことを知ってもらいたいという思いもあります。奏子と周子に関するクイズを出したり、手紙を付けた風船を空に飛ばしたりしています。生前の姉たちの話をする中で、「お姉ちゃんたちは、決して神さまではなく、面白いことをしたり、保育園の先生に怒られたりしてたんだよ」と伝えたいのです。生きているきょうだいは、親にたくさん叱られていくのですが、亡くなった子供たちはこれ以上親に叱られることはありません。親は、怒ることすら、もうできないのです。ですから、我が家のきょうだいたちには、自分たちと同じように、お姉ちゃんたちも怒られていたのだということを知ってもらいたい。そういう思いで、毎年偲ぶ会を開いています。

○ 遺された子供たちへの対応の失敗

事故当時、私のおなかの中には三女がいました。事故から 6 週間後、無事に生まれました。その後、長男、次男、四女が生まれました。私は、私たち自身に知識がなかったために、この遺された子供たちを傷つけてしまった失敗があります。ある日、自宅で取材を受けていました。記者の方が「井上さん、ちょっと映像を拝見していいですか」と言うので、私はテレビで事故の生々しい映像を流してしまいました。子供たちが同じ部屋にいるにもかかわらず、子供たちにとって、事故の映像を見たのはそれが初めてでした。三女と長男は、その場で激しく泣き出してしまいました。ずいぶん経ってから、「子供が現場に居合わ

せていなかったのであれば、凄惨な現場の写真や映像は見せないほうがよい」という専門家の見識を聞き、正にその逆をしてしまったこと、子供たちの心情に無頓着だったことを反省しました。私たちは、世の中の方々にこの映像を観ていただき、飲酒運転の被害がどれだけ恐ろしいものなのかを知っていただきたいとは思っていますが、我が子たちにはあえて見せるべきではなかったと、申し訳ない気持ちです。

もう一つ、失敗があります。娘の学童保育では毎月お誕生会が開かれるのですが、そのお誕生会に合わせて、親が子供に書いたメッセージを先生が読み上げるといった場面があります。私も「あなたは、お姉ちゃんたちがいなくなってしまった6週間後に生まれてきました。親にとって、あなたが生まれてきてくれたことは本当にうれしいことです」といったメッセージを書きました。先生が私のメッセージを読み始めたところ、それを聞いていた娘が大泣きしてしまったそうです。学童保育のお友達も、姉たちが事故で亡くなり、三女自身も事故に巻き込まれたことについて、必ずしも知っているわけではありません。そんな中で、自分の家族がどのようにして亡くなったのか、全員に露わにされてしまいました。親として、三女への配慮が足りなかったと猛省しています。

子供たちは、進学、就職など、これからどんどん環境が変わります。そのたびに、事故を知っている人は少なくなっていくと思います。その中で、必ずしも子供たちは全ての人に事故について知ってもらいたいわけではありません。ごく一部の心許せるお友達にしか言わないかもしれません。誰に知ってもらいたいのか、それを選ぶ権利は彼らにあるのです。親が勝手に乱暴なことをしてしまっただけなのだと痛感した出来事でした。

○ 家族を亡くした子供の支援のために

子供という視点から支援を考えるうえで、私は、今まで私たち大人は、子供の意思を十分確認し、尊重してこなかったのではないかと思います。まだ子供だから判断できないだろうと思い、葬儀の際に遺体を見せたり触らせたりしないほうがよいと感じる大人の方もいらっしゃると思います。子供は、意思がなく、判断できないというわけではありません。大人が勝手に判断するのではなく、葬儀への参列や火葬場への同行など、重要な場面において、子供の意思を聞き、尊重することが重要なのではないかと思います。

大人と同様に、子供も外では社会生活を送っています。その中で関わっている人たち、例えば学校や習い事の先生など、どの人まで家族の死について伝えてよいのか、子供に確認することが必要です。親や親戚が、勝手に家族の死を伝えてしまうことのないよう、配慮が必要であると思います。この内閣府の交通事故被害者サポート事業の調査では、家族を亡くした当時、子供だった人たちの生々しい声や意見が紹介されています。20年以上も前に家族を亡くしたことであるにもかかわらず、まるで昨日のことのように赤裸々に気持ちを伝えてくださっています。「子供だからわからない」というような思いを、私たち大人は持つてはいけません。

大人が欲しいと願っている支援と子供が欲しいと願っている支援は、両者とも根本的に

同じなのではないでしょうか。私自身、被害者になったからといって、何も判断できず、自分の意思がないような弱い人間になってしまったかのように扱われることが一番つらいことだったと感じています。全く同じことが、子供に対しても言えるのではないかと思います。

私は、講演等で話をすることがよくありますが、事故や事件後に大人が陥る状況について話しながら「そうか、自分の状態の裏で、子供たちはこんな苦勞をしていたのだな」と気付かされたことがあります。例えば、子供を亡くして動揺している両親の傍らで、親戚に「お父さんとお母さんを支えてあげてね」と言われてしまう子。被害に遭ったことで、親が今まで普通にこなしてきた家事や料理ができなくなり、何年間も外食やコンビニの食事で過ごさなくてはならない子。親が車に乗れなくなり生活が大きく変わってしまった子。亡くなったきょうだいで頭が一杯で、以前のように注目してもらえなくなった子。最悪の場合、両親が事故や事件を契機に考え方が違ってしまい、両親や親戚同士が不仲になることもあります。今まで、両親、おじいちゃんやおばあちゃん、みんな仲良くしていたのに、関係が断ち切られてしまう。このような機能不全に陥ってしまった大人たちの中で暮らさなくてはならない状況は、子供にとって、はたして健全なのでしょうか。大人たちが陥る状況の裏で、子供はさまざまな苦勞をしているのだと思います。

家族の誰かが亡くなるということは、その人がいなくなるということだけではありません。特に子供にとっては、父や母を失くすことにもつながります。先日、この事業の会議において、わかりやすい言葉でそのことについて語ってくれた方がいらっしゃいました。「私自身が、事故で自らのきょうだいを亡くしただけではなく、事故前までであった自分の父親や母親、それまでも失くしてしまったのです。」家族を亡くすだけではない、家族そのものも崩壊するといった状況があるのです。一度崩壊した家族を、どうやって再構成し、取り戻していくのか、そこには非常に大きな不安があると思います。

私たち大人は、さまざまな活動や同じ境遇の人との出会いを通して、自分自身の発散の場があると思います。そういう場はとても重要です。子供にとっても同じであり、同じような境遇の仲間や友達がいる、その存在を知ることが必要です。その一例をご紹介します。一昨年、犯罪被害者が集まるイベントが、一泊二日で開かれました。沖縄から北海道まで、さまざまな犯罪に遭い家族を亡くした人たちが集まる会なのですが、親に連れられてたくさんの子供たちもやってきます。気付くと、子供たちは別室で遊びながら、なんとなく親の話をして「ああ、うちも同じなんだよ」といった言葉を交わしていました。それを見て、私はこのような場所は、大人と同じように、子供にとっても非常に大事な場所、癒しの場所になっているのだなと感じました。

私は、家族を亡くした子供の支援のためには、親や学校とは全く関係のない人が、子供に寄り添ってくれることが必要なのではないかと思っています。親や先生とはつながっておらず、できれば知識のある人に、子供に寄り添っていただきたい。機能不全に陥ってしまった親に対して、ストレスを溜めない子供はいません。しかし、子供は親に対して文句

を言えないのです。そんな子供の気持ちを考えて、受け止めてくれる人が必要なのだと思います。親への怒りや文句を当たり前のこととして受け止め、秘密を守ってくれる存在が必要です。話を聴いてくれた方は、その内容を親には絶対に漏らさないでいただきたいし、また親自身も、子供の気持ちを詮索しようなどと思ってはいけないと感じています。

家族を亡くしたという点で同じであっても、親を亡くしたのか、きょうだいを亡くしたのかによって、子供の受け皿には大きな違いがあります。きょうだいは亡くしたが、親は生きている場合、その子供に支援の手を差し伸べてくださる機関がほとんどないのが、今の日本の現状なのです。きょうだいを亡くした子供を支援してくださる団体を、私は切望しています。私がしてしまったような失敗を繰り返さないため、また、きょうだいを亡くした子供に関する情報、知識、経験を共有するため、そのための受け皿がほしいと願っています。私たち親たちよりも長い時間を生きていく子供たちに、心身ともに健康で生き続けてもらいたい。そのための継続的な支援をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

3. 講演「家族を亡くした子供の支援」

子どもグリーフサポートステーションの代表である西田正弘氏より、「家族を亡くした子供の支援」についての講演が行なわれた。講演の要旨は、以下の通りである。

〔講演要旨〕

特定非営利活動法人子どもグリーフサポートステーション 代表 西田正弘 氏

○ 子供のグリーフサポートについて

仙台にある「子どもグリーフサポートステーション」では、親、祖父母、きょうだい、友人など大切な人を亡くした子供に対して、さまざまな支援を行なっている。「グリーフ」は、病気ではなく、人間のごく自然な反応である。「サポート」という言葉には「主役を支える脇役」という意味もあり、被害当事者が、自分のグリーフに丁寧に触れるようになるために行なうことが「グリーフワーク」の基本である。なお、グリーフサポートやグリーフワークといった心のケアは、生活が成り立って初めて成立するため、同時に経済的な支援も行なっていくことが必要である。アメリカでは、心のケアを「ビリーブメントサポート (Bereavement support: 死別サポート)」と呼ぶようである。「死別サポート」と言い換えてみると、心の問題だけではなく、経済的な問題等があること、またその問題をどのように解決するべきなのかが、同時に進んでいかなければならないということ、わかっているわけではないだろうか。

○ 「子どもグリーフサポートステーション」の活動

「子どもグリーフサポートステーション」では、子供を中心にグリーフサポートを行なったり、勉強が遅れがちの子供に学習支援を行なったりしている。また、保護者同士が話し合う場を設け、法律等の相談業務も行なっている。

子供のグリーフサポートにおいて、実際に行なっていることをご紹介します。1カ月に1～2回程度、子供たちに集ってもらいグリーフプログラムを実施している。プログラム冒頭の始まりの輪では、ファシリテーターを交えて自己紹介をする。誰が亡くなったのかについて聞き、話せる子には話してもらおう。「お父さんが、交通事故で亡くなりました」と、具体的に話してくれる子もいれば、「パス」と言って話さない子もいるなど、さまざまである。その後、遊んだり、話をしたりしながら、数時間子供たちと過ごしている。学校や地域において普段の生活を送る中で、子供たちが1カ月に1～2回程度、同じような経験をした人たちで、遊んだり話をしたりするためのサポートの場所を提供し、時には専門家につなぐ。そういったサポートをイメージしながら、活動している。

○ グリーフサポートに携わるきっかけ

私は12歳の時に、交通事故で当時49歳の父親を亡くした。今、私は当時の父親の年齢

を越したわけであるが、とても不思議な感じがする。12歳の少年として、私は「生きる」ということを知る前に、「人は死ぬ」ということを突き付けられたように思う。「次は誰が死ぬのか」と感じたり、学校から帰って母親が不在の時は、不安になったりした。

グリーフサポートを仕事として取り組むようになったのは、阪神淡路大震災がきっかけであった。600人近い子供が家族を亡くし、彼らをいかにサポートするかという課題を突き付けられた。アメリカのダギーセンターについて勉強し、さまざまな死別を経験した子供たちのサポートを始めるようになった。

○ 死別を経験した子供の反応と周囲からの対応

死別を経験した子供の反応は、人によりさまざまである。罪責感、未来に対する不安、「自分をコントロールできない」という気持ち、家族からの孤立。保護者が混乱すると、子供も不安になる。子供が保護者を支える側に回ることもある。そのような状況では、支援者は子供と大人を含めた家族全体をサポートすることが必要となってくる。

いい子でいる子供は、大人からは見えにくい存在である。しかし、子供が元気そうにしているからといって、大丈夫とは言えない。子供は、いろいろなことを考え努力しているからこそ、元気そうに見えるのである。頑張っていてエネルギーを使いながら生活している子供は、どこかで「もうこれ以上頑張ることはできない」という状態になる可能性が高い。頑張っている子供こそ、特に気をつけて見ていかなければならないのである。

周囲の大人が、死別を体験した子供に対してかける言葉には、「済んだことを早く忘れなさい」、「お母さんを助けてあげてね」、「勉強の遅れを取り戻しなさい」、「頑張っただね」、「お金がないのに、進学するの？」などがあるが、私自身も同様の言葉をかけられた。反対に、「今、あなたはどんな気持ちでいるのか、教えて欲しい」と聞かれたことはない。大人は、良かれと思ひ、あれもこれもと言いがちであるが、子供はアドバイスというよりも、「どんな気持ちなのか教えて」というように、自分たちの見えている世界を一緒に見ようとしてくれる大人が必要なのではないかと思っている。

○ グリーフサポートの支援者とは

死別という出来事は、どんどん過去となっていき、周囲も時が経つにつれて「もう大丈夫なのではないか」と思いがちであるが、当事者にとっては、出来事自体は過去のものになったとしても、死別体験から起こるグリーフやその影響は、今も続いているのである。命日や誕生日などの記念日に、故人を思い出すことは、ごく自然のことであり、いろいろな気持ちに再び揺り動かされることもあるだろう。

死には、「1人称の死」、「2人称の死」、「3人称の死」がある。1人称の死は自分自身が死ぬこと。2人称の死は、家族が死ぬこと。3人称は、自分と遠くにある人の死である。3人称の場合、例えば誰かが亡くなったというニュースを見ても、その時は「大変だ」と思っても大きな衝撃は受けない。一方で、2人称、すなわち家族が亡くなった場合、その衝撃は

大きいだろう。支援する側に立つ人は、3人称のように離れた感覚ではなく、しかし2人称のように近すぎる感覚でもない、2人称と半分程度の距離で支援する人の気持ちをわかろうとする努力が必要なのではないかと思う。

悲しんでいる人に代わって、他者が悲しんであげることにはできない。当事者が、いろいろな悲しみや痛みを、自分の力で丁寧に扱うことができるように、周囲がサポートをする。それが、グリーフサポートであると考えている。当事者が壊れないように、誰かに「助けて」と言うことができるようなつながりを、周囲が作っていくことが重要なのである。

○ ピアサポートの重要性

ピアサポートとは、同じような体験したもの同士が、批判せずお互いを認め合いながら、それぞれ固有の体験談を語り合い、聞き合い、支え合うつながり。また、誰かと一緒にいながら自分自身でいられる場を意味する。

- ・「ピア (Peer)」＝同じような体験をした者同士
- ・「シェア (Share)」＝自分の気持ちに丁寧に触れながら、自分の言葉で語る。その場にいる人の話を聞き合う。
- ・「エンパワー (Empower)」＝比較せず、非難せず、それぞれの歩みを認め合い、指示し、支え合う
- ・「モデル (Model)」＝誰かの歩み、気の持ち方か考え方を参考にする。

これらは、当事者にとって、非常に重要なものである。

○ 子供へのサポート

子供は、家族や経済面での状況が変化してしまった場合、我慢することが多くなる。ステーションでは子供が自分を取り戻す時間、自分がしたいことをする時間、自分のペースを作る時間を、遊びを通して提供するようになっている。普段は親にも先生にも話せないことを、「あのね」と話すことができる時間を確保する。それによって、子供は「自分はひとりぼっちじゃない、誰かが見てくれている」、「自分は自分でいい」と思えるようになる。奨学金などの制度を受けると「夢をあきらめずに、追いかけていいんだ」と思える。奨学金の情報は、伝えるだけでも大きなサポートになる。2人称と半分程度の距離を保てる大人が子供と一緒に遊ぶ環境は、子供にとって望ましいと思う。

○ 支援者の役割とは

我々のような支援者は、悲嘆の中にいる人が、自分の気持ちに丁寧に触れることができ、新しい生活に対応することができるように、手助けすることが役割ではないだろうか。当事者が自殺に追い込まれないように、自分らしい生活が送れるように、人間関係がスムーズになるように、悲しい中であつても楽しみごとができるように、困った時は「助けて」といえるように、そんなつながりを、当事者と共に持てることができたらと思う。

4. パネルディスカッション「子供の頃に交通事故で家族を亡くすということ」

子供の頃に家族を亡くした方3名より、「子供の頃に交通事故で家族を亡くすということ」について、自身の体験談が語られた。その後、井上郁美氏と西田正弘氏から、お話を聴いた感想が述べられ、最後にコーディネーター岩切昌宏氏との間で質疑応答が行なわれた。

① 子供の頃に交通事故で家族を亡くした方のお話

佐藤悠貴（さとう ゆうき）氏

○ 事故の概要

私は、5年前のバイク事故により、父親を亡くしました。当時14歳の中学生だったので、当時のことはよく憶えています。学校から帰宅すると、祖母から父の事故のことを聞きました。最初、父は多分大丈夫なのだろうと思っていましたが、母が病院から泣きそうになりながら「早く病院に来て」と言った声を聞いて、もうだめなのかもしれないと感じました。父の葬儀が終わった後、つらい気持ちを抱えながら登校しました。私がいないうちに、先生方が同級生たちに事故について説明してくれていたおかげで、誰も事故のことには触れずにいてくれました。周囲の人も普段通りに接してくれたので、中学校を卒業することができました。高校に入学すると、自分の父が事故で亡くなったことを知っている人はほぼいなくなりました。最初は父親の話が出るたびに「嫌だな」と思いましたが、亡くなったと伝えると、相手も理解してくれ、それ以上は何も聞いてこなかったのが助かりました。

今こうやって思い出すと、母はとても強い人だと感じています。父が亡くなった時、私は何か母の力になりたいと思ったのですが、何もできず、励ますどころか逆に母に励まされるような生活を送っていました。母がつらそうな姿を見せることはなく、母や親戚が父の事故処理を全て行なってくれて、とても感謝しています。

○ 周囲の対応について

周囲の対応で困ったことは、先生から「お父さんの職業は」などと父について聞かれることでした。自分の父について話すことに対しては、あまり気が進みませんでした。高校と大学では、父が亡くなったことを知らない友達と話すことが多く、父について話を振られると、私は「少し言いにくいんだけど」といった感じになってしまい、空気が悪くなることがあります。でも周囲の人は皆普通で、自分と家族だけが、父が亡くなったことを悲しんでいるだけです。いつも通りの生活を送っている周囲の人の中で、自分だけがつらい顔をしていることは、良くないなと感じています。私の家族は、皆仲が良く、父がいた時からよく話す家族でした。事故後も家族で仲良く話をしてきたので、心に深い傷を負うこともなく過ごせたのだと思います。母も妹もあまり悲しい顔を見せないのも、自分だけが悲しんでいたらいけないなという思いもあり、多少我慢もしていたと思います。

周りの対応で良かったことは、自分が家族の中で唯一の男性となったことで、周囲の人から「これからお母さんを支えるのはあなただよ」と言われたことです。プレッシャーにもなったのですが、逆に自分が母を助けられるなら、頑張らなければいけないなと思い、

今、一生懸命大学で勉強しています。周囲の人が、父が亡くなったことを知っても、普通に話しかけてくれるだけで、だいぶ心が軽くなった気がします。

私が、家族を亡くした子供の支援として必要であると思うものは、やはり経済的な支援です。現在、私は奨学金のおかげで、大学に通うことができます。とても感謝しています。また、カウンセリングや、同じような境遇の人と話せる場所も必要であると思います。そのような支援をしていただければ良いなと思います。ありがとうございました。

平尾悠子（ひらお ゆうこ）氏

○ 事故の概要

平成 11 年の 12 月 25 日、クリスマスの夜に、飲酒運転をした車がセンターラインを越えて、妹の乗っていた車に正面衝突しました。妹と友人、合わせて 3 人が亡くなる大事故でした。私は当時、実家がある島根県を離れ、京都で大学生活を送っていました。島根の母からの電話で事故を知った私は、急いで実家に戻りました。電話で事故の一報を知らされたということで、その後しばらくの間は、電話の音がとても怖く感じるようになりました。妹が亡くなったことで、「妹の分も頑張っただよ」や、「お父さんお母さんを支えてあげると言われることが嫌だったのを憶えています。本当につらかったです。

葬儀などすべてが終わり、私は京都に戻ったのですが、周囲の人たちは誰も、私から言わない限り、妹の事故については知らないという状況でした。そのためか、周りからは特に気遣われることはありませんでした。私はとても悲しいのに、周囲の人は普段通りに過ごしている。そのことに違和感を持ったことを憶えています。自分から、誰に、どう助けを求めていいのか、何を相談していいのかもわからなかった状況で、今思い返せば、あの時誰か相談できる人がいれば良かったと思います。実家の母は、周囲が心配して声をかけてくるので、外に出ることが嫌だと言っていました。私は羨ましいと思っていました。

事故の後、母は私と亡くなった妹を比べるようになりました。事故から 2 年ほど経った頃、家族で旅行をしたのですが、旅行中ずっと天気が悪く、母はそれを私のせいだと言いました。妹がいたらきっと晴れただろうに、私がいるから天気が悪いのだと。母が辛いことはよくわかっていたため、私はそんな母に反抗することもなく、ただ一人、夜に泣いていました。そのような状況の中、私は実家に帰ることが嫌になり、親との関係も悪くなりました。弟とは、妹について話すことはほとんどありませんでした。ただ、母がそのような状態の中、たぶん家事もできていなかったと思います。弟は当時どのように過ごしていたのか、今になって気になることではあります。現在は、母も以前のように明るくなり、私との関係も良好なものに戻っています。

○ 家族を亡くした子供の支援に必要なこと

家族を亡くした子供に必要な支援として、大事な人を亡くした時に、人がどんな感情を持つのか、体にどんな変化があるのか、具体的なグリーフのプロセスを教えてもらうことが重要ではないかと思っています。事故の後、私が死ねばよかったと思っているところへ、自

分の記憶力も落ちてしまい、自分は生きている価値がないと思うほど、追い込まれました。死に関する本を読み、それはグリーフのプロセスで起こりうることだと知りましたが、当時そのことを知っておけば、心が幾分かは楽になったのにとおもいます。きょうだいを亡くした人に関する本は非常に少なかったのですが、母親が若林和美さんの「死別の悲しみを超えて」という本を薦めてくれました。その本の中に、きょうだいを亡くした人の気持ちを代弁しているような箇所があります。私は、その本に救われたと思っています。

私は、妹が亡くなった直後よりも、時間が経過した頃がとてつらい時期でした。そのため、一度心療内科に行ったことがあります。また、同じような事故で妹を亡くした人と連絡を取るようになって、自分の思いを吐き出し、楽になることができました。私は自分から心療内科に行ったり、同じような立場の人と連絡を取ったりすることができる年齢でしたが、小さな子供にはそのような選択肢はありません。小さな子供にも専門家の話を聴く機会があれば、それだけで心が軽くなり、日常生活も送りやすくなるのではないのでしょうか。ただ話を聴いてもらえる人がいるだけでも助かります。そのような支援があれば良いと思います。ありがとうございました。

森 幸（もり さち）氏

○ 事故の概要

今から30年前の昭和59年11月、出勤途中だった父は、堤防から橋げたに降りる急カーブで、橋げたに衝突し亡くなりました。父は即死でした。私は今でも、誰かに抱かれてベッドに横たわる人の足元を見降ろしている夢を何度も見ます。その横たわる人は父だと感じるのですが、それは実際の記憶なのか、私が作ってしまったイメージなのかは、わかりません。

当時姉は5歳、私は3歳、弟は生まれて2カ月でした。父を3歳で亡くしたと言うと、「じゃあ全く憶えていないね」と言われるのですが、私は父の事を今でも思い出します。父に肩車されて高い所から見た景色、父がススキの穂で作ってくれたフクロウ、アイスを食べる私を見ながら煙草を吸う父、テレビの前で寝転んでいる父、弟が生まれる時、母がいない家で泣いている私を一生懸命楽しませようとしてくれた父。怒ったことなんて一度もない、すごく優しい人でした。事故後私たちは、母の実家で祖父母と暮らすことになりましたが、どうしてお家に帰れないのだろうと不安になったことを憶えています。

○ 父を亡くした悲しい思い

父親を事故で亡くしたことで、悲しい思いもしました。幼稚園のころ、父の日に母の似顔絵を描いたら、私だけ掲示してもらえませんでした。学校に行くようになると、「お金はどこからきているの」と、友人からも先生からも聞かれました。中学生になっても、高校生になっても、教師は興味本位でお金のことを聞いてきました。先生という立場の人が、親を亡くした子供にこれほどに無理解であったことを残念に思います。

この事例は、本シンポジウムの共催である、(独)自動車事故対策機構や(公財)交通遺

児育英会ではないことを強調した上で聴いていただきたいのですが、ある交通遺児支援団体のお誘いで高校進学のお祝い会に出席しました。会の終了後、「交通遺児」と書かれたゼッケンをつけ、街で募金活動をするように言われました。私は、恥ずかしさと悔しさで、身体中がかっと熱くなり、夢中でポケットティッシュを人に押し付けました。「なぜこのようなことをしなければならないのか」、「私はいったい何をお願いしているのか」と、頭が混乱する中、私たちはこれまで他人の同情を買い、施しを受けていたのかと思い、自分が惨めでたまらなくなりました。それ以降、スーパーやコンビニに交通遺児のための募金箱が置いてあることや、駅前で同じ年齢の高校生たちが交通遺児のために募金活動をしていることに気が付きはじめました。あちこちで私は施しを受けているのだ、皆に同情される存在なのだと思います、消えてしまいたい気持ちになりました。

母は私たちに「社会が助けてくれているのだから、しっかり力をつけて社会に貢献できる人間になりなさい」と、いつも言いました。私は、絶対に力をつけて社会に返そうと思いました。それが良い考えだったのかはわかりません。事故で親を亡くした子供も、同じように自由に生きていいのだから、社会に借りを作っているといた考えは、子供にとって可哀そうな気がします。ただ、あの時の母には、「これはあなたへの投資だから、受け取ってもいいのよ」としか援護できなかったのだと思いますし、私も「自分が返せばいいのだ、社会が私に期待しているのだ」と思わないと受け取れなかったのだと思います。そうしたこともあり、高校生の私は、父を亡くしたことをあまり人に言わないほうがよいと思うようになっていました。

ある日、私の家に遊びに来た高校の同級生が、父の遺影を見て初めて私の父が亡くなっていることを知り、「さっちゃんのお父さんは、どんなお父さんだったの？」と聞かれました。私は、いつも優しかったこと、私をいつも抱っこして連れ出してくれたこと、数学が得意で、スポーツマンで、祖父の会社を継ぎ、家族を愛し、周りの人からも愛されていたこと、そんな父を誇りに思っていると話しました。友人は、「さっちゃんのお父さんだったら、そうだろうね」と嬉しそうに聞いてくれました。彼女も、お父さんを誇りに思っていると話してくれました。いつもは、父の話をするとうる覚えされたり、たまに無遠慮な人に「どうして死んだの」と聞かれたりしていた私は、この時の彼女との会話が特別嬉しく感じました。今でもこのことは忘れられません。私は父をずっと誇りに思い、愛しているのです。

○ 家族を亡くした子供にとって大切なこと

母子家庭というのはそれだけで貧乏だと思われたり、見下されたりしがちです。私は生まれも育ちも何も恥じることはないといつも強く思っていました。それは周りからの母子家庭への否定的な感情、交通遺児に対する同情を感じて緊張していたからこそだと思います。私は母子家庭の友人と仲良くなるのがよくありましたが、緊張感なく、気楽に付き合えたからだと思います。交通遺児同士が仲良くなれる機会は、そういう意味で大切なものだと思います。子供同士で仲良くなれる場があると良いと思います。

私は小さい頃から、(独)自動車事故対策機構の絵画コンクールや書道コンクールに応募

していましたが、主催する方たちが、いつも絵画や書道の出品を楽しみに待っていてくれる、それぞれの子の成長を楽しみにしていることを知りました。身内でもない人が、自分の成長を喜んで楽しみにしている。そういう人たちが、身近でつながっている。遺児にとってもその家族にとっても心強いものだと思います。また、子供にとっては、返還義務のない奨学金があると良いと思います。家族を亡くした子供には、深い傷がありますが、その分強くなって成長する部分もあると思います。そこを奨学金で後押ししてもらえば、本当に助かります。私はたくさんの援護をうけて、大学に通わせていただき、現在は歯科医として仕事をしております。援護を受けながら恥ずかしい成績は取れないと思い、勉強しました。多くの援護によって大人になれたことを、心から感謝しています。

先日、姉が父の年齢を超えました。私自身、父の歳までに死んでしまうのではないかと考えることがありましたが、姉にも同じような感覚があったようです。最近、姉と父の話をするのがよくあります。父についてずっと話したかったことを、姉と、やっと話せるようになりました。このシンポジウムに登壇するにあたり、交通遺児としての自分の半生を振り返ったことで、気持ちの整理ができました。受け入れることが怖かったことも、もう今の私には怖くないと理解し、受け入れることができるようになりました。このような機会を与えてくださったことに感謝しています。ありがとうございました。

② パネリストのお話を聴いて

井上郁美氏

今日 3 人の方の貴重なお話を聴かせていただき、このようなお話をもっと発信していかなければならないと思いました。今日、このシンポジウムに来られなかった、同じような立場の人が「私と同じ気持ちの人がいる」と知ることができるようにする必要があるなと思いました。

私も、事故直後から小さい子供たちを連れて全国で活動をする中で、同じような立場の仲間ができました。私の子供を、小さな頃から知ってくれている仲間の存在、共に子供の成長を喜んでくれる仲間の存在は、とても心強いです。それが子供たちにも良い影響を与えていると思います。親だけでは至らなかったさまざまな部分で、遺族の仲間や、それを理解して支えようとしてくださる遺族ではない人たちの存在は大きいのです。我が子の成長を見るかのように喜んでくださっていることは、子供たちにとって貴重な財産であると思います。専門家ではない人たちにも、犯罪や交通事故で家族を亡くしてしまった子供たちへの支援をお願いすることができるし、また支援していただくことができるのだと、改めて感じました。ありがとうございます。

西田正弘氏

眼差しは、とても大切だと思います。しかし「かわいそうだね」といった眼差しは、かえって子供たちの成長や、自分の気持ちを丁寧に扱うことを邪魔してしまうのではないかと

なと思います。私たちが、子供の気持ちを分かち合いながら、「一緒に歩いていきませんか」というメッセージを送ることが重要だと思います。大人が子供の成長に付き合うことで、全くの他人でも、遠い親戚のような感覚を持つようになると思いますが、その距離感が大切だと思います。子供の傍らで、そのような眼差しを向ける大人の存在が必要だと、改めて思いました。

子供の成長にとって大切なことは、亡くなられた人の生き様を知る、特に小さい頃に家族を亡くした場合は、どんな人であったのか、何を大事にしていたのかについて知ること、また伝えることだと思います。生き様に触れることで、亡き人とつながることができます。サポートする側も、亡くなった人の生き様を大切にする姿勢が必要です。生きていた人がいて私がいる、その生き様と一緒にシェアするということが、人生の中で大事にするということは、非常に大切なことだと思います。

岩切昌宏氏

支援を行なう中で、事故や事件で家族を亡くした子供までなかなか手が回らない、どうしても親が優先されてしまうといったことは、よくあります。そんな状況であっても、わがままを言わずに苦労している子供は、結構多いのです。今日のお話は、大変貴重であると思います。

家族を亡くした子供が、さまざまな形でのつながりを持てるような場を提供し、広げていくことが必要です。一般的には、親に対するサポートについてもまだ不十分であると思いますが、今後は、親が集まる場所で子供たちも集まってくるときに、サポートができ、つながりができるようなことも念頭に行なっていかななくてはと思います。

③ 質疑応答

質疑応答では、コーディネーターの岩切昌宏氏がパネリストの方3名に質問を投げかけ、それに答えるという形で進められた。それを受けて、井上郁美氏及び西田正弘氏から、感想が述べられた。

岩切氏：事故後生きていく中で、心の支えとなったものはありますか。

佐藤氏：心の支えとなったものは、家族です。誰よりも気持ちを知っていて、一番リラックスして話すことができる家族が、一番の心の支えになっています。また、家族以外に他の自分の居場所や、友達などと話せる空間があったことも、心の支えになりました。

平尾氏：私も同じく、家族の存在が支えになりました。ずっと妹の後を追って死にたいと思っていましたが、親が嘆き悲しむ姿を見ていたので、私も死んだらまた親が悲

しい思いをするという思いがありました。親のために生きていようという気持ちが、心の支えでした。

森 氏：父が亡くなった後、母がめそめそしている姿を見ることはなかったのですが、一度だけ、母がうずくまって頭を抱えて唸っているのを見ました。その時、強烈に母は苦しいのだと感じました。きょうだいは皆、母を楽しい気持ちにしてあげたいと、いつも思っていました。当時 2 カ月だった弟は、家の中がバタバタしていたせいで、いつも座布団の上に転がされているような状態でした。私はそんな弟が可愛くて、私が守ってあげるといつも思っていました。父がいないぶん、母を助け、きょうだいを守っていこうという思いが、支えになっていたのだと思います。自分が置かれた環境に戸惑うことがありましたが、そこから新しい喜びを見つけること、家族を楽しませることを、しがみつきながらやっていたと思います。まだ 3 歳の子供が、自分の弟を守ろうと思うなんて信じられないと思いますが、私は念じるようにそれを思っていました。それは、この突然変えられた環境から逃げたいという気持の反面、ここに留まるには私が前を向いていかなければという気持ちがあったからだと思います。

平尾氏：私は自分のことしか考えておらず、死んだ妹に対しても怒りを感じていました。私の人生が狂ってしまったと。5 年経って、やっと死んだ妹が一番かわいそうなのだなどと気づき、ようやく怒りがおさまりました。グリーフの過程では、怒りの感情を持つこともあると知り、私は正常なんだ、怒っていいんだと思えました。

佐藤氏：私は、父を亡くしてまだそれほど経っていないので、いろいろなことを勉強しなければいけないなと思いました。

井上氏：今日のお話は、どれも「15 年前に聞いていれば、どんなに良かっただろう」と思えるお話ばかりでした。親として、踏んではいけない地雷を知っていれば、気をつけることはできただろうにと思います。子供が配慮してほしいこと、何が嬉しいと感じるのかについて、大人がレベルアップを図っていかなくてはいけないと思います。

西田氏：ありがとうございました。今日このシンポジウムで共有したことを、いかに社会でも共有するかという段階に持っていかなくてはならないと思うのです。それがなければ、家族を亡くした子供の支援は広がっていかないと思います。きちんと見届ける、聴き届ける、社会全体で共有する、それが重要であると思います。ありがとうございました。

岩切氏：今日の貴重な体験を、社会に広げていくということが大切ではないかと思います。家族を亡くした子供たちをどのようにサポートしていくのか、何ができるのかも含めて、今日聴いたことを広めていただきたい。私自身も、聴いたからには、次につなげていかななくてはならないと思いました。佐藤さん、平尾さん、森さんに、改めて拍手を送りたいと思います。ありがとうございました。

IV. 交通事故で家族を亡くした子供の支援に関するシンポジウムのまとめと今後の方向性

1. まとめ

(1) 開催について

「交通事故で家族を亡くした子供の支援」に関するシンポジウムは、関係者が会議室に集まるスタイルばかりではなく、オープンな形で世の中に対して情報を発信し、共有化し、理解を深めていきたいという主旨により、昨年度は東京で、今年度は2回目として大阪で開催したものである。家族を亡くした子供の支援については、阪神淡路大震災を契機として東日本大震災の後、これまで以上に関心が持たれるようになってきたテーマであり、本シンポジウムも多くの方の関心を集め、交通事故被害者等の支援に携わる者や交通事故被害者遺族、行政担当者、家族を亡くした子供の支援に関心のある学生・一般の方など、多方面から約140名の参加となった。

シンポジウムでは、専門家の基調講演やご遺族から親の立場としての講演、支援者からの講演が行なわれ、多様な視点からの情報提供がなされた。また、パネルディスカッションにおいては、子供の頃に家族を亡くした経験のある当事者の方にお話いただき、つらい経験が交通事故の直後だけでなく、その後の長い時間に渡り、色々な場面において影響し、そのときどきにおいて悩み、傷つくことがあることをお話いただいた。

アンケートからも本シンポジウムが大変好評であったことが示されており、回答した全員が「有意義であった」と回答していることから、非常に密度の濃い、充実した内容であったことがうかがえる。交通事故で家族を亡くした子供には、多様な支援が必要であると感じられる、貴重な情報提供の場となった。

(2) 構成について

シンポジウムの内容について、まず岩切昌宏氏の基調講演については、悲嘆や悲嘆反応について子供の年齢による違い、また複雑性悲嘆といった専門的な内容を一般の方にもわかりやすくご講義いただいた。アンケートからは、「悲嘆にはそれぞれ固有の形があることが改めて認識できた」、「専門的なことを知ることができた」という意見が多く寄せられた。

また、ご遺族からの講演については、交通事故で子供を亡くしたご遺族の立場から、井

上郁美氏にお話いただいた。交通事故によって、家族が機能不全になる中で、親は子供に
してはいけないことがわからず、失敗することも多い。また誰にも悩みを話せず、誰から
も支援を受けずに苦しむ子供が多い。国内では、家族を亡くした子供、特にきょうだいを
亡くした子供を支援する団体がほとんどないことなど、自身の体験を交えてお話いただき、
ご遺族をはじめ交通事故被害者等を支援する者にとっても大変有益な情報提供がなされた。

支援者からの講演については、西田正弘氏にお話いただいた。自身が代表を務める「子
どもグリーフサポートステーション」の活動の紹介や子供のグリーフを支援する者の役割
について、具体例を交えながらわかりやすくご説明いただいた。アンケートからは、「子供
が話をできる場所が必要」、「全ての人がグリーフについて正しい理解を持つことが大切」
といった意見が多く寄せられていた。

子供の頃に家族を亡くされた方のパネルディスカッションについて、パネリストは父親
を亡くされた方が2名、きょうだいを亡くされた方が1名の3名構成でお話いただいた。
事故時の年齢や家族構成、時間の経過などそれぞれ異なっていたため、家族の死から受け
る影響や周囲から受ける影響が異なることがよく理解できる構成であった。「子供の頃に交
通事故で家族を亡くした」という共通点はあっても、その状況によって子供が感じるこ
とや必要な支援が異なること、またそれぞれに深い悲しみがあるという点について、非常
にわかりやすくお話いただいた。交通事故で家族を亡くした子供の支援に関する具体的な情
報提供がなされ、会場の参加者にも情報の共有化が図られた。

2. 今後の方向性

今後の方向性についての主な検討内容は、以下のとおりである。

(1) 開催地域について

シンポジウムについては、多くの方にお越しいただき、直接聴いていただくことが望ま
しいが、開催地域が遠い等により参加することが難しい場合もある。シンポジウムの様子
を映像化し、ウェブサイト等で視聴できるようにすることも可能かと思われるが、やはり
直接聴く言葉と映像を通しての言葉では受ける印象が異なる面もあることから、できる
だけ直接会場にお越しいただくほうが効果的である。これまで東京と大阪においてシンポジ
ウムを開催したが、今後このようなシンポジウムを開催する際には、地方において開催
することを検討するなど、開催地域については今後の検討課題とする。

(2) 情報発信と共有化に向けて

シンポジウムにおいて、専門家やパネリストからは「家族を亡くした子供が話せる場」
があるとよいという事例が挙げられていた。また当事者からは、「事故直後にグリーフの知
識があるとよかった」、「当時このようなことを知っていたら、これほど思い悩まずに済ん
だかもしれない」という事例が挙げられていた。家族を亡くした子供や、専門家ではない

周囲にいる大人や友人が、どのように対応すればよいかといった知識が一層広まることが望まれる。国民全体でこの問題に取り組むため、今後一層、交通事故で家族を亡くした子供の支援に関する情報を広く世の中に発信・共有できるよう、事業を進めていく必要がある。